

博 士 学 位 論 文

— 論文要旨および審査結果の要旨 —

第 12 号

武蔵野音楽大学

— は し が き —

本編は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規定による公表を目的として、平成29年度に本学において博士(音楽)の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第 21 号	博士 (音楽)	浅野 洋介	《メーリケ歌曲集》におけるヴォルフの 宗教的な歌曲の解釈について	1

氏名	あきの ようすけ 浅野 洋介
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博甲第 21 号
学位授与日	平成 30 年 7 月 31 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	《メーリケ歌曲集》におけるヴォルフの宗教的な歌曲の解釈について
論文審査委員	主査 教授 小畑 朱実 副査 特任教授 寺本 まり子 副査 准教授 稲田 隆之 副査 講師 田口 宗明 副査 講師 福田 弥 (慶応義塾大学准教授)

論 文 要 旨

19 世紀後半の後期ロマン主義を代表する作曲家フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) は、MGG の「歌曲」の項目では「その抒情詩の選択を通じて詩人そのものを音楽的に描写しようとした」と評価されている。彼の代表作《声楽とピアノのためのエドゥアルト・メーリケの詩集》(メーリケ歌曲集) は、詩人の多様な主題を網羅し、無名であったメーリケの再評価に繋がった。しかし実際の《メーリケ歌曲集》に目を移すと、キリスト教の教義における「受難」を中心とした宗教的なペシミズムを描いた 10 曲の「宗教的」な歌曲が、メーリケの『詩集』とは異なる配列で歌曲集の中心に集められている点が目に留まる。メーリケの宗教的な表現は、彼の自伝的小説『画家ノルテン』との関連を中心に彼の悲恋の恋愛体験と結びつき、性的な衝動が罪であり、死をもたらすという罪の意識である。詩人の考えによるのなら、恋愛の要素と関連しながら紡がれるべき「宗教的」な歌曲をヴォルフが「受難」の色合いを強めて打ち出しているのは何故であろうか。

ヴォルフの「宗教的 *geistlich*」という観点からは、初期の作品《アイヒェンドルフの詩による 6 つの歌曲》というアカペラの合唱曲が浮かび上がる。アイヒェンドルフは、「神的な事柄を知覚し伝達する」という宗教文学に価値を置いた文豪である。ヴォルフは、彼の「宗教的な詩」から 6 編を選択し、合唱曲でありながらも「歌曲集 *Lieder*」と表題を付けた。そして、この歌曲集の創作過程では、ヴォルフの宗教的な概念が垣間見える。ヴォルフは、イースターの時期に書かれたヘンリエッテ宛の手紙において、「ふさわしくないものではない」という言葉を通じてキリスト教の教義における「救済」の概念を表し、ヴォルフは「神の現像をみることが聖なる芸術」という芸術家の使命として宗教的な表現を捉えている。そ

してこの手紙では、ヴァーグナーに強い影響を与えたショーペンハウアーとの繋がりをも示されている。

この《アイヒェンドルフの詩による6つの歌曲》では、神の絶対的な権威が示されると共に、原罪を通じてその神の「導き」に対し「苦悩」する姿が描かれている。その「苦悩」は、第4曲〈最後の願い〉において「もはや、望むことも願うこともない」ほどに深まり、第5曲〈従順〉では罪びととしての裁きをうける「導き」となる。この思考は、ヴォルフの手紙に示されたショーペンハウアーとの繋がりを読み起こさせる。ヴァーグナーが「救済論」として読んだショーペンハウアーの主著では、宗教に対して否定的ではあるが、「苦悩」には「人を神聖にする力」があるとした上で、「苦悩」を通じて「諦念」へと達することが、「生と苦悩からの解脱」となり、それこそが「真の救い」として捉えていた。ヴォルフの宗教的な表現は、ショーペンハウアー的な「苦悩」の概念をキリスト教の教義における「原罪」の葛藤に結び付け、「神の現像」を表現するという芸術家としての使命によっていることが指摘できるのである。

このヴォルフの芸術的概念は、ヴォルフが《メーリケ歌曲集》の中心においた「宗教的」な歌曲に描かれている宗教的なペシミズムの表現を明らかにする。彼は、この曲群の中で、宗教画に基づく2つの作品において対比的に描かれている罪なき幼子イエスの姿とその運命の象徴としての十字架を通じて「受難」の色合いを打ち出す。そしてそれは、自然描写的に作曲されることで宗教的な厳かさが保たれた〈受難週〉に引き継がれる。メーリケの「想像力の媒体」としての「日の出」を描いた〈明け方に〉は、「朝の鐘」というモチーフを通じて宗教性が見いだされ、《アイヒェンドルフの6つの詩による歌曲》において神の導きとしての光を描いていたE-durによってそれは象徴される。しかし、この歌曲は、宗教的な「答え」として位置づけられずに、明朗な神の賛美である〈新年に〉と共に曲群の前半に置かれる。キリスト教的な苦悩は〈祈り〉から始まる。〈眠りに寄す〉では、《トリスタンとイゾルデ》のモチーフ、そして〈おやすみ、おやすみ〉と同一の転調方法を通じて、罪からの解放である「救済」としての「死」が描かれる。〈新しい愛〉と〈慰めはどこに?〉では、初期の歌曲集に見られた、そして《メーリケ歌曲集》では音楽的にも結びつけられたペアとして、神の愛とそれに答えられない「苦悩」が対比される。この「苦悩」は、〈新しい愛〉において神の愛を知ったことの「甘い衝撃」と同じGes音へと向かう、ヴァーグナーの「槍のモチーフ」によって音楽的に関連させながら描かれている。そして、この「苦悩」は、古い祈祷書に基づく〈ため息〉によってこの曲群の初めに予告されているのである。

ヴォルフの《メーリケ歌曲集》における「宗教的」な歌曲は、キリスト教の原罪に対するショーペンハウアー的な「苦悩」の表現であり、その解釈は、歌曲集の配列によって示されているのである。

論文審査結果の要旨

フーゴ・ヴォルフの《メーリケ歌曲集》を研究対象として、この歌曲集はメーリケの『詩集』とは異なる配列により、10曲の宗教的歌曲がその中心に置かれていることに着目した。

ヴォルフの「芸術観がどのように音楽的に表現されているか」を明らかにすることで、これらの歌曲の再評価を論文の目的としている。そのために、ヴォルフの芸術的観念や作曲への取り組み方を明らかにした上で考察をするという方法をとっている。それに関連して、宗教的歌曲のグループが、ヴォルフにとっていかなる意義をもつのかを明らかにすることも目的である。すなわち「宗教的」作品がヴォルフの創作において重要な位置を占めることを、《メーリケ歌曲集》の配列から明らかにするという試みである。

初期作品と同様に《メーリケ歌曲集》における「宗教的」な歌曲には、「苦悩」が描かれ、それが「救済」に至る。その解釈は、詩の選択と配列、調性によって象徴されるという結論に達した。

先行研究に対する批判的考察も十分になされ、それらにおける課題と自分の研究との位置関係も適切に把握されていると言える。各歌曲の詩および楽曲に対する分析は非常に丁寧で良い。また筆者のこだわった「詩人そのものを音楽的に描写しようとした」ことを論証するために検証を重ねた点についても評価できる。

結論ではショーペンハウアーの「救済」と「諦念」、ヴァーグナーからの引用、調性格論について、ヴォルフ自身がどのように述べているかが明確ではない。しかしこれは解釈の根拠をヴォルフ本人の言説に見出すことがかなり難しいために、結論の焦点がぼけたことは否めない。

しかしながら、ヴォルフの歌曲とその原詩について、韻律論からの分析については丁寧になされており、特に詩の韻律とそれに対するヴォルフの積極的な解釈について踏み込み、ヴォルフが大切にした言葉から宗教的なものへの解釈についての考察を詳細に行っている点は説得力があり、高く評価できる。

以上のように、本論文はヴォルフの《メーリケ歌曲集》の解釈に新たな地平を開くものとして、今後のヴォルフの演奏と研究に寄与できる可能性を示しており、課程博士の称号を授与する水準に十分に達していると判断出来る。

演奏審査委員

氏名	あさの ようすけ 浅野 洋介
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博甲第 21 号
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
演奏曲目	H. ヴォルフ 《声楽とピアノのためのエドゥアルト・メーリケの詩集 <i>Gedichte von Eduard Mörike für eine Singstimme und Klavier</i> 》より 第 1 曲 〈希望の傍らの回復者 Der Genesene an die Hoffnung〉 他
演奏審査委員	主査 教授 小畑 朱実 副査 教授 吉池 道子 副査 教授 菊池 英美 副査 教授 山口 道子 副査 教授 堀内 康雄 副査 教授 青山 智英子 副査 教授 佐橋 美起 副査 准教授 岩永 圭子 副査 准教授 黒田 彰 副査 講師 森永 朝子 副査 講師 谷 友博 副査 講師 田口 宗明

演奏審査結果の要旨

演奏曲目

H. ヴォルフ	《声楽とピアノのためのエドゥアルト・メーリケの詩集
H. Wolf	<i>Gedichte von Eduard Mörike für eine Singstimme und Klavier</i> 》より
第 1 曲	〈希望の傍らの回復者 Der Genesene an die Hoffnung〉
第 17 曲	〈庭師 Der Gärtner〉
第 8 曲	〈出会い Begegnung〉
第 5 曲	〈鼓手 Der Tambour〉
第 47 曲	〈ムンメル湖の妖精 Die Geister am Mummelsee〉
第 23 曲	〈古画に Auf ein altes Bild〉
第 30 曲	〈新しい愛 Neue Liebe〉
第 31 曲	〈慰めはどこに? Wo find ich Trost?〉

- A. イェンゼン 《ロマンスとバラード *Romanzen und Balladen*》 op.41 より
A. Jensen 第2曲 〈花嫁 *Die Braut*〉
- E. ヴェレス 《異郷からの歌曲 *Lieder aus der Fremde*》 op.15 より
E. Wellesz 第1曲 〈秘密に満ちたフルート *Die geheimniswolle Flöte*〉
第2曲 〈孤独 *Einsam*〉
- Y. チュウ 《深い夜に *In tiefer Nacht*》
Y. Chiu
- G. マーラー 《リュッケルトの詩による5つの歌曲
Fünf Lieder nach Gedichten von Rückert》 より
G. Mahler 第2曲 〈私は心地よい香りをかいだ
Ich atmet' einen linden Duft〉
第5曲 〈美しさを求めて愛するのなら
Liebst du um Schönheit〉
第1曲 〈私の歌を除かないで *Blicke mir nicht in die Lieder*〉
第4曲 〈真夜中に *Um Mitternacht*〉
第3曲 〈私はこの世から忘れられ
Ich bin der Welt abhanden gekommen〉

フーゴー・ヴォルフの《メーリケ歌曲集》の中から選択された8曲のうち、物語性が強い前半の4作品では言葉を豊かに表現することが求められるが、個々の観点が非常に整理され、高い演技性が感じられた。第47曲〈ムンメル湖の妖精〉はダクテュルスの韻律を明確に再現し、正確なリズムに則って語ることによって、抑揚の豊かな表現に至った。ことに拍子が次々と変化する最後の3小節においては、極めて早口で子音とリズムを立たせて歌い上げた。

後半3曲の宗教的な歌曲では、ピアニッシモからフォルティッシモまでの幅広い声量の差を巧みにコントロールし、ファルセットとミックスヴォイスを使用することで陰影がつけられた。それによって、ピアノと歌唱双方の表現力が融合された演奏に結実した。

休憩後のアドルフ・イェンゼンの作品では、声を押すことなく自然に歌っていた。抒情的で明るい音楽の中に潜む哀しみに踏み込んで表現することへの踏み込みが少々甘かったものの、詩の朗読に音楽がつけられているかのような滑らかな歌唱は評価出来る。

シェーンベルクの弟子エゴン・ヴェレスの12音技法を用いた曲では、丁寧に詩を語り込み、ピアノとの掛け合いが丁寧に積み重ねられて、音楽作りに説得力があった。

イェン・ニン・チュウの作品は、3年前に受験者自身がドイツで初演をした、シュプレッヒシュティンメの使用や、リズムのコントラストによる演技性の高い曲である。歌とピアノのそれぞれが強く自己主張をすることによって、掛け合いが際立つ秀逸な出来であった。

マーラーの《リュッケルト歌曲集》の前半3作品では、レガートに注意をしながらも言葉の抑揚を妨げないように気を配っていた。第4曲〈真夜中に〉では、ゆっくりとしたテンポの中で集中力を途切れさせずに丁寧に作り上げた。最後の長いフレーズの前のブレスが深ければ、より長い音価を伸ばせたであろう。第3曲〈私はこの世から忘れられ〉では、リズムが立たない旋律を、ファルセットやミックスヴォイスの技術を多く使用し、静かな雰囲気のまま演奏を終了した。長時間に渡り、集中力を途切らすことなく丁寧に演奏して来たプログラムの、最後に相応しい終わり方であった。

今後の課題として、発声技術の更なる研鑽を積んで欲しいとの意見が多くの審査委員から出された。しかしながら、上述のごとく総体的に高く評価することができ、大学院博士後期課程学位審査合格に値する、学位審査演奏であったことを認める。

博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨 (第 12 号)

平成 30 年 10 月 20 日発行

発 行 武蔵野音楽大学大学院

編 集 武蔵野音楽大学学務部

〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1

電話 03-3992-1128
